

# 大塚久雄と朱紹文

——中国における比較経済史学の受容——

齋 藤 英 里  
孫 宏 程<sup>1</sup>

## はじめに

朱紹文（1915–2011）は改革開放後の中国経済学界を代表する重鎮で、日本の学界とも交流が深かった<sup>2</sup>。2011年11月3日、96歳で死去した際、中国社会科学院は彼を偲ぶ記事と写真を掲載し、冒頭でその経歴を次のように紹介した。

我が国の有名な経済思想史研究者、日本経済研究の専門家、中国社会科学院経済学部名誉学部委員、中国社会科学院経済研究所研究員、東京大学客員教授、英国グラスゴー大学社会科学院客員研究員、前民建中央常務委員、第7回政治協商会議委員及び外事委員会委員<sup>3</sup>

内外での高い評価の一端がうかがえよう。だが、社会科学院研究所研究員の就任は1979年であり、この時朱は既に60歳を過ぎていた。東大、グラスゴー大学の客員教授就任はそれぞれ、1984年、1989年であった<sup>4</sup>。朱が中国で再評価されたのは晩年にさしかかってからのことであり、ここにいたるまでの人生は苦難の連続であった。戦時期の日本留学時代には共產主義者にして抗日活動家とみなされ、治安維持法のかどで逮捕、拷問を受けた。九段の憲兵隊本部から巣鴨刑務所に移送され、計7か月の投獄の後、「無罪」となり釈放された朱は、1945年3月、妻と幼い息子を連れて決死のなか、下関から釜山を経由して帰国した。戦後にはようやく中国で教

職につくが、地下の民主化運動に参加したため、国民党から「左派」とみなされ、また投獄された。共産党政権になると、今度はブルジョア思想に染まった「右派」とみなされ、22年間も自由を奪われた。朱の人生は政治に翻弄され続けた。

本稿は戦時期の日本に渡り、旧制第一高等学校（以下、一高と表記）を経て、東京帝国大学経済学部さらに同大学院で大河内一男（1905-1984）に学んだ朱紹文と、そのもう一人の恩師、大塚久雄（1907-1996）との関係について紹介し、中国における比較経済史の受容の一端について考察するものである。

朱に関する先行研究は幾つかあり、直近でも田島（2020）、阪本（2021）、三田（2021）、田島（2022）、阪本（2022）らの論稿が相次いで公表されている。阪本論稿は、朱の妻（博昭）の父で戦前・戦時期の福島高商で20年間に渡り教鞭をとった博棣華（1890-1949）の生涯と朱昭文のそれとを重ねて紹介している。福島高商には、当時梶山力、小林昇、藤田五郎など大塚久雄と関係の深い研究者が多数いたことは奇遇である。三田は1999年9月に朱から聞き取りを行ったほか、2018年1月に上海図書館で文献調査を行っている。三田（2021）はその成果であり、朱が日本留学中に『新東方雑誌』や『揚子江』に連載した論稿、さらに帰国後、中国で発表した時事論などを紹介している<sup>5</sup>。中国経済が専門の田島は中国社会科学院に二度留学した経験を持ち、同研究所内に東大の社会科学研究所の基地を設けるなど朱との交流が深く、その葬儀にも立ち会っている。田島（2020）、さらにこれを改めた田島（2022）は、戦時下の日本留学時代のみならず、朱の人生とその学問の全体像や日本人経済学者との交流を解説した詳細な論稿である。前掲、三田が骨子を紹介した朱（1943）は、田島（2020）でも言及されている。

ただし、これらの先行研究において朱の日本留学を語る場合、大河内との関係が当然のことであるが、中心になっており、大塚久雄との関係については、断片的な記述にとどまっている。だが、朱が東大時代の勉学を語

る際、大河内とともに大塚も登場していることに注目したい。この点、朱と大塚の関係を中心に論じた研究は本稿がおそらく初めてであり、先行研究に新たな知見を加えることができるのではないだろうか。まだ未解明の点も幾つかあるが、朱の来日 90 年を記念して、ここに掲載するしたいである。

## 1. 比較経済史と東アジア

大塚久雄の学問を考える場合、彼が無教会基督教を提唱した内村鑑三の弟子である点は重要である。内村は欧米の宣教師によるミッションの形式的・優越的態度を批判し、欧米から独立した日本独自の基督教を樹立した。内村にとっては、Jesus とともに Japan が重要であった。それは偏狭な国家主義に基づいた「日本」ではなく、普遍的な価値を支える「日本」であった。内村への関心は日本だけにとどまらず、韓国や台湾においても強く、無教会がこれらの国々をはじめ各国に広まっているのはその証左である<sup>6</sup>。

大塚は学生時代に内村から授洗されるとともに、信仰と社会科学の両立についても大きな示唆を受けた。経済史家として大塚も欧米の学説を単に輸入・紹介するのではなく、前期的資本、中産的生産者層、局地的市場圏など自前の概念を構築し、日本人の眼によって西欧資本主義の発生過程や、近代社会成立の歴史的 분석を行なった。大塚久雄の経済史研究は、顔は西洋を向いていたが、内実は近代以降の日本（ひろくはアジア）が直面していた世界史的課題（近代化ないし、国民経済の自立化、市民社会の形成）の制度的・人間的諸条件を欧米の歴史のなかに探るものであった。大塚の「西洋経済史」はこのような意味での「比較経済史」であり、それゆえ「日本経済史」と言える面もあった<sup>7</sup>。こうした性格を持つ大塚の学問や思想が東アジア諸国においてどのように受容され、批判されたかは興味深い問題である。

日本の社会科学の朝鮮・韓国への導入については、ある程度知られてい

る。それはまず、日本統治下の時代、かの地から日本へ渡った学生によって本格的に始まったようである<sup>8</sup>。では、そうした学生のなかに経済史や思想史に関心を持った者はいないのだろうか？ 石崎津義男が著した大塚の評伝には、それまで全くといってよいほど知られていなかった大塚と朝鮮人学生との様々なエピソードが盛り込まれている<sup>9</sup>。こうした交流が基礎になったのか、韓国では1980年頃から大塚や高橋幸八郎らの比較経済史の研究成果が翻訳されている<sup>10</sup>。

比較経済史の中国への紹介も、戦前に日本へ渡った学生から始まったと思われる。この点、直ちに想起するのが、戦後に台湾大学教授となった張漢裕（1913-1998）である。張は戦前東京大学において植民政策学者の矢内原忠雄のもと、植民史および植民思想史を研究していた。その際、前期的資本に関する論稿を著していた法政大学時代の大塚に商業資本の役割について尋ねている。1937年12月に恩師矢内原が東大から追われ、1939年1月の平賀肅学後、大塚が法政大学から東大経済学部にて講師として復帰して以降、経済学部助手であった張は大塚の演習に参加し、指導を受けることとなった<sup>11</sup>。『イギリス重商主義研究』（岩波書店、1954年）はその代表的な成果である。副題は「国民主義的生産力保育体系の一類型その基盤・政策及び論説」であった。「国民主義的生産力」という表現にも大塚の影響が感じられる。同書の序は、矢内原、大塚二人への感謝にあふれている。「研究に生命のいきを吹きこまれた」のが矢内原であり、「理論の上で食ろうによきものを与えられた」のが大塚であったという<sup>12</sup>。

張に続いて大塚に学びその影響を受けた中国人が、張より2歳若い朱紹文であろう。張が矢内原のほか大塚にも学んだように、朱も大河内のもと、フリードリヒ・リストやアダム・スミスの経済学説を学ぶなかで、大塚からの影響も受けた<sup>13</sup>。

以下、2では朱の半生と学問について紹介する。ただし、朱の生涯については上記の先行研究でかなり紹介されているので、繰り返しが多いが、本稿では主に日本留学時代までの人格形成や戦時期の学問に絞って紹介し

たい。3では、大河内・大塚と朱との関係についてのべる。4では朱の大塚史学についての評価や『発生史論』に寄せた解説文を紹介し、比較経済史学の中国への受容について論じたい。

## 2. 朱紹文の半生と学問

朱は1980年代半ば以降、日本の学界やマスコミに登場し、広く知られるようになった。その人生行路については種々の記事・論稿があるが、大別すると自身による回想とインタビュー記事に分かれる。前者としては、①朱（1986）、②朱（1990）、③朱（1992）、④朱（1999b）がある。①は大河内の訪中が紹介されている。②は大塚の講義の印象やその学問の意義についてのべている（後述）。③と④は一高同窓会に寄せた思い出の記事である。

後者としては①1985年の『経済セミナー』誌上で、佐藤金三郎（横浜国大教授）を聞き手に、恩師大河内との関係や現代中国の経済改革について語ったのが最初であろう<sup>14</sup>。その後は②1994年11月から95年2月にかけて鍾少華を聞き手にしたインタビューがあり<sup>15</sup>、③2004年に朝日新聞社編集委員の加藤千洋を相手に4回にわたって『図書』（岩波書店）に連載された記事がある<sup>16</sup>。以下、これらの回想やインタビューを参考にし、本稿の趣旨に必要な限りにおいて朱の半生を紹介するが<sup>17</sup>、証言の利用には多少の限界があることも留意したい<sup>18</sup>。

朱紹文（チュ・シャオ・ウェン）は中国東部の江蘇州で生まれた。本名は朝仁（ツァオ・レエン）で、朝廷の仁になる者という意味であった。紹文と名乗るようになったのは、戦時期の日本から脱出した際、上海の日本人憲兵から逃れるために改名する必要がある、かつ尊敬する孫文にあやかったからであったと言う<sup>19</sup>。朱は泰県の中学を卒業すると、上海の正始高等中学で学んでいる。正始中学は上海のフランス租界にある新設の全寮制私学であった。叔父のすすめで同校を受験し、スムーズに合格したこと

が大きな転機になったと回想している<sup>20</sup>。ここで学んだ意義は大きい。まず一つは、寮生活の経験である。この経験が一高でも役立ったのではないか。もう一つは同校がフランス租界にあったことである。上海は抗日運動が盛んであったが、フランス租界の（しかも全寮制であるため）、外部からほとんど隔絶した環境のもと、朱らはヨーロッパ文化について学ぶことができた。ただし、その内容は西洋崇拜主義であり、多くの学生が後に欧米に留学したのに対して、朱は最終的には西洋文化の崇拜者にならなかった。朱の祖父は漢学者であり、清朝解体後は漢方医として生活を維持した。その教養は幼少期から朱に受け継がれている<sup>21</sup>。欧米と日本に次々に侵略され、分裂した祖国中国。その解放と独立の論理を朱は、中国人としての自覚にたちつつ、同じアジアの日本の経験から批判的に学ぼうとしたのではないか。

1934年7月に同校を卒業した朱が長崎丸で来日したのは、同年9月のことである。同船は中央部には一等客室があり、社交室、喫煙室、酒場などが置かれる豪華客船であった<sup>22</sup>。ただし、学生の朱が乗ったのは三等であり、父親からもらった銀貨何百元を手に、まる三日間味噌汁をすすり、板の間に寝ながらのつらい船旅であった。1924年に就航した長崎丸は「日中友好」の証であった。しかし、1931年9月に満州事件、さらに1932年1月に上海事変が起こるなど、日中関係は30年代に入って極めて悪化していた。こうした時期に朱は「虎穴に入らずんば、虎兇をえず」の言葉を日記に書き<sup>23</sup>、「日本の近代化<sup>24</sup>」を学ぶため、敵国日本に渡ったのである。

正始中学は中学と高等部に分かれており、朱が学んだのは高等部であった。日本の高等学校に相当するにもかかわらず、中国の教育制度は日本と異なることから、中学しか出ていなかったとみなされた朱は、日本の大学を受験するため、まず高校に改めて入学しなければならなかった。1934年9月、長崎に着いた朱はただちに上京し、神保町にある東亜高等予備校で日本語を、研数学館で数学を学び、高校受験に備えた。神保町の古書街は朱にとって生活と学びの場（書齋）であった。一高時代に大河内の著作

に出会ったのも、そうした古書店であった（後述）。

1935年4月、朱は一高の特設高等科に入学した。既に二十歳になっていた。同科は1907年以来継続されてきた特設予科を発展的に解消したもので、1932年新たに設置されている<sup>25</sup>。朱はその3期生として寮生活を送った。この経験について、「東方人の刻苦奮励、志士仁人の生活態度は自身の個性の形成に役立った<sup>26</sup>」と回想している。後年、朱は東大時代の親しい友人として、安藤良雄（1917-85）、横山正彦（1917-86）、隅谷三喜男（1916-2003）、松岡馨木（1919-1995）、遠藤湘吉（1916-75）らの名をあげている。朱によれば彼らは「ほとんど一高から東大の経済という同じような経歴の持ち主<sup>27</sup>」であり、一高時代の絆の強さを指摘している。なお、東大では経済学部と法学部の講義の多くは共通であり、その縁で中曽根康弘（静岡高校卒）とも親しくしていた。1984年には、総理大臣になった中曽根と首相官邸で再会している<sup>28</sup>。

土屋喬雄のもとで日本経済史を学んだ安藤（弘前高校卒）は朱より2歳年下だったが、朱と同じく1939年4月入学の同期生であった。朱に大塚久雄について教えたのも安藤であった（後述）。横山、松岡とは大河内演習の同期生でもあった<sup>29</sup>。しかし、友人として最も親しかったのは隅谷ではないだろうか。東大でも隅谷とはいつも一緒だったと回想している。79年以降の日本再訪では、大河内、大塚の恩師とともに、隅谷の名を一高以来の学友としてあげ、感激の再会を果たした<sup>30</sup>。

隅谷が一高に入学したのは、朱の入学の前年、1934年秋のことであった。二年次から隅谷は寮委員に任命され、さらに総代会の副議長を経て、3年次の春には議長となった。実は一高では日本人の本科生と留学生が属する特設高等科とは入試や授業も別であり、その関係は微妙であった<sup>31</sup>。この時、本科生と留学生の融合をめざしたのが、棣華会であった。その活動の呼びかけとなったのが、隅谷や澄田智（後の日銀総裁）をはじめとする本科生6人と朱ら留学生10人であった<sup>32</sup>。二人の友情はこの時から、深まったのではないか。隅谷はキリスト教徒であったが、マルクス主義への

関心から、東大在学中に治安維持法で逮捕された。東大卒業後は中国に渡り、現地の労働者の福祉向上のため、満州の昭和製鋼所で働いた。戦後になると東大に戻り、大河内の社会政策講座を受け継ぎ、労働経済学者となるなど、朱との接点は多々あったことも付言したい<sup>33</sup>。

### 3. 朱の二人の恩師

一年間の浪人生活を経て、朱が東京帝国大学経済学部に入學したのは前述のように1939年4月のことであった。朱は正始中学時代から商科が好きで、かなり経済学の知識を学んでいたことから<sup>34</sup>、来日前から経済学を学ぶ意思があった。一高を卒業し、無試験で京都帝大経済学部に入學することも可能だった朱が東大を志すきっかけとなったのは、一高時代に大河内の『独逸社会政策思想史』（日本評論社、1936年）を古本屋で立ち読みし、どうしても大河内の門下生になりたいと思ったからであった<sup>35</sup>。

同書は大河内の初期の代表作で、700頁を超える浩瀚な書である。大河内が東大で演習を担当する3年前に著されたこの本は、「すくなくとも数多くの学生たちが…内容そのものに理解にはまだ遠く及ばなかったとはいえ、尊敬と畏怖の入りまじった感情でとりこんでいた<sup>36</sup>」文献であった。その書を朱は既に高校時代に読んでいたのである。

朱が大河内演習を志したもう一つの理由がある。大河内のF.リストに関する特別講義を聞いたことである<sup>37</sup>。上掲『独逸社会政策思想史』では、社会政策学会を中心とするワグナー、シュモラー、ブレンターノに集中し、旧歴史学派の検討はそれと関連する限りにおいてのみ対象としてとりあげられていたから、リストは後景に位置していた<sup>38</sup>。朱が生涯のテーマとするリストへの関心は文献ではなく、まずは講義によって触発された。

1940年4月、朱は大河内演習に第1期生として入る<sup>39</sup>。経済学史グループの同期生は14名であった。大河内から与えられたテーマも、まさにこのリストであった。ドイツの愛国者リストの研究は、中国の近代化を考え

る朱の関心にふさわしいテーマであった。朱は大河内のもと、「リストを中心に、アダム・スミスの国富論も参照しつつ勉強をはじめた<sup>40</sup>」。ただし、学部演習時代について、これ以上のことは現時点で筆者にはわからない。大河内演習史には演習生の研究テーマは記載されているものの、卒業論文に関する情報はない。

1941年12月、朱らは東大を3か月早く繰り上げ卒業している（早期卒業の方針は8月に決まっていた）。10月に東条内閣が成立し、米英に宣戦布告したのも、この年の12月8日であった。学友の多くが学徒動員されるなか、朱は大河内の勧めで大学院に進んでいる。1942年度の大河内演習では、「大学院生朱朝仁が客員として参加している<sup>41</sup>」との記載がある。大河内を補佐し、学生を指導していたのではないか<sup>42</sup>。

大学院時代の論稿としては、「リストの生産力理論と現代中国」がある。佐藤によるインタビューでは、これが書かれたのは1942年か43年のことだと言う<sup>43</sup>。リストが提唱する国民国家とその国民国家を支える工業力について検討し、リストの生産力理論が中国にあてはまるのではないかと考えた成果である。この時期、大河内自身の研究テーマも、スミスとリストであった。大河内著『スミスとリスト 経済倫理と経済理論』は1943年、日本評論社から刊行された。朱の論文は、類似のテーマをほぼ同時に研究する恩師の指導のもと書かれたのである。

大河内と朱のリスト研究を比較するとどうなるか？ 佐藤のこの質問に対して、大河内がナチ的に解釈されてきたリストのイメージを克服し、経済学説史家としてリストを科学的・歴史主義的に論じたのに対して、朱は大河内の方法を使って、もっと現実的関心から論じるという違いがあったと答えている<sup>44</sup>。現実的関心は大河内にもあったが、朱の場合、祖国中国の政治経済的統一と独立自由の獲得が重要であったことは言うまでもない。前述の朱の論稿は、その最初の成果であろうか。三田（2021）によれば、この論稿は米英帝国主義打倒をめざす日本の聖戦への協力を肯定しながらも、その前提として、日本からの独立を主張している点を重視し、

ここに日本への言外の反抗を見ている<sup>45</sup>。

この間、朱には生活面での大きな変化があった。1943年には清朝貴族の孫娘（博昭）と結婚し、翌年長男が生まれている。結婚式は上海の正始中学の図書室で行われ、一時帰国した。日本外務省からの奨学金は学部時代から引き続き支給され、勉学と生活を支えていた。しかし、その生活は長くは続かなかった。精魂込めて執筆していた博士論文は、逮捕時に他の蔵書とともに憲兵に没収され、戻らなかった<sup>46</sup>。

話題を大塚久雄に移す。朱が東大に入学する直前の1月、平賀肅学で東大経済学部の教授7名、助教授以下7名が辞表提出という異常事態が起こり、学内は壊滅的な打撃を受けた。大河内も恩師河合栄治郎に従い、辞職願を提出するが、後に説得を受けて撤回している。一高生だった朱にも、そのような動向は当然知られるところであっただろう。反動的な人事が行われるなか、学生から唯一歓迎されたのが、法政大学から移籍してきた大塚久雄であった。大塚と大河内は東大の良心であった。大河内演習生が著した回想録のなかでも、大塚に関しては高い評価がうかがえる。当時、「勉強する気なら大河内演習か大塚演習だ<sup>47</sup>」というのが学生の定評であった。大塚の欧州経済史の講義が学生を魅了し、前年に本位田祥男の講義で単位を取得した学生まで聴講していたことや、大塚に触発されマニフアクチャー論争も演習のなかで論じられたことなども記されている<sup>48</sup>。

東大経済学部の大塚ゼミ同窓会（ヨーマン会）が編纂した記念文集（ヨーマン会編『師・友・学問—ヨーマン会の半世紀—』（非売品、1990））には、会員ではないが、大塚ゼミ開始前後に大塚と近しかった4名による「特別寄稿」が掲載されている。松田智雄（1911-1995）、前述の張漢裕（1913-1998）、小林昇（1916-2010）の3名に加えて、もう一人が朱紹文、その人であった。朱はここで、『大塚史学』と中国の近代化」と題したエッセイを寄稿している。以下、その内容を要約する。

朱は東大に入学して間もなく、法政大学から移籍してきた大塚の講義を受講している。その初講義の印象を朱は後年まで鮮明に覚えており、次の

ように語っている。

その日、天気晴朗、「肅学」の影など少しも見えず、日光が左側の窓から法・経第七番教室の三分の一まで差し込んでいた。教室のなかは活気溢れん許り、殆ど新入生で満員の盛況であった。私は安藤良雄君から先生のことについて少し教えられていたので、密かに喜んで先生の登壇を待っていた<sup>49</sup>。

大塚の講義を聴いているうちに、進歩的な感覚が胸に伝わり、よかったという気持ちで一杯だったと言う。講義のなかで前期的商業資本、問屋商人などの反動性を列挙した時、大塚が何を差して言っているのかが、皆が以心伝心でわかった。祖国の近代化という人生の課題を背負った朱にとっては、猶更だった。この講義（欧州経済史）で使用した教科書こそ、1938年12月刊行の『欧洲経済史序説』（時潮社）であった。

朱は『序説』をどのように読んだのだろうか？ なかなか理解できず、註の多さにいかに学問すべきかを知ったこと、特にその「序」は何回読んでも理解できず、数十年の思索が必要だったと回想している<sup>50</sup>。朱をはじめ東大の学生は、『資本論』と山田盛太郎の『日本資本主義分析』を読んでいた。それでも、『序説』の理解に数十年もの思索が必要だったのは、大塚の講義を祖国中国の近代化に適用するための模索からだと思われる。

朱の脳裏に残っているのは、農村の織元と都市の織元の史的分析や、封建的圧力の弱いところつまり「窮郷僻壤」の辺境地区に近代的資本が発展しやすいことなどであった。この『序説』は大河内の古い本とともに、朱が日本から脱出する際、中国に持ち出された（憲兵隊の押収番号「押第437号」）。中国に齎された最初の『序説』であろうと回想している<sup>51</sup>。

大塚の経済史にもリストは大きな影響を与えている。その著作にリストが本格的に現れるのは、1940年以降である<sup>52</sup>。特に戦時期の生産（諸）力論は重要である。大河内（1943）が対象としたアダム・スミスの経済倫理とリストの生産力を「経済倫理と生産力」とし、ヴェーバーを導入して

問題を展開したのが大塚（1942）、大塚（1943）などであった。ここで、大塚はリストの「精神資本」の観点に注目し、生産力を物的なものだけでなく、精神的要素も入れて幅広く解釈している。これこそ、国民が歴史的に形成してきた要素である。リストの言う「人間的国民的生産力」もまた同義であった。朱が感銘を受けた大塚の『序説』の「序」の一節（註50参照）をこの生産力論と重ね合わせると、その意味は一層明らかであろう。生産力ではなく、〈諸力〉としばしば表記されるゆえんである<sup>53</sup>。

この時期、リスト研究を始めた重要な人物がもう一人いる。小林昇である。小林は1937年大河内の外国書講読でリストを学びつつ、演習では大塚と同じく西洋経済史の本位田をのものと、重商主義をテーマにしていた。小林は朱が東大に入学した1939年には既に卒業しており、会社勤めを経て、1940年9月、福島高商に講師として赴任する。担当は植民政策であった（ただし、張漢裕の師の矢内原からの影響は受けていないようである）。このような経歴を考えると、朱と小林が戦時期に東大で交流する機会はなかったと考えられる<sup>54</sup>。

小林もヨーマン会編（1990）の特別寄稿者の一人であったことは、前述した。ここで小林は「大塚先生への報告」と題して大塚との出会いや本位田演習での思い出を語っている。その後半部分は自身のリスト研究が、大塚史学の土壌の上に成立したことを詳しくのべている。このように、松田智雄も含めてヨーマン会編（1990）の特別寄稿者4名すべてがリストや重商主義研究に深く関係していた。これらの研究者の位置づけや関係については今後も検討していきたい<sup>55</sup>。

三田（2021）によれば、中国帰国後の1947年に、朱は天皇制を厳しく批判する論稿「対日講和と日本の改造」を『清議』第7期1号に著す。その際、次のように西洋経済史の知識をもとに主張を展開していることに注目したい。

日本の旧体制の中枢となるのが天皇制である。これは単に裕仁一個人の

存廃問題では断じてない。西洋経済史の知識に従えば、封建勢力と資本主義制度は両立しないものであるが、日本は天皇制の存在によってこの二つが統一的に存在しているのである。……<sup>56</sup>

このような認識は、講座派マルクス主義の影響だけでなく、大塚の講義や著作が背景にあったと考えられる。その主張は新憲法のもと象徴天皇制になっても変わることはなかったのではないか。

#### 4. 比較経済史の評価

朱（1990）は前掲、ヨーマン会編（1990）への「特別寄稿」のなかで、7年ほど前に「大塚久雄先生と大塚史学」という紹介文を書き、後に『当代世界著名経済学家』社会学出版社に収録され、中国経済学界で大変な関心を以て読まれているとのべている。しかも、いわゆる大塚史学の体系を紹介するだけでなく、先生の生涯を貫く学問する心、求道的精神、気力と品徳も伝えたいとの願いを表明している<sup>57</sup>。

同書は筆者は未見であるが、同じ題名の論稿が『經典經濟学与現代經濟学』（北京大学出版会、1999年）や、大塚久雄著『株式会社発生史論』の中国訳（後述）の「付録」としても掲載されていることを知った。これらの解説では、1996年の大塚の逝去についても記載しているので、前掲稿を後に加筆したものと思われる。『經典經濟学……』は500頁近い大著であり、表紙にスミス、リスト、マルクスの肖像を掲げている。経済思想史家としての朱紹文の研究の集大成である。

本書は7つの編から構成されているが、最後の第7編は「現代日本経済学」と題し、そのなかに、「私が尊敬する経済学者一わが師わが友」として10人が時代順に紹介されている。大塚久雄は、山田盛太郎、久留鯨蔵、宇野弘蔵、大河内一男の後にとりあげられている。その後は、本位田門下の高宮晋、同期の横山正彦、さらに都留重人、小宮隆太郎、宇沢弘文と続いている。これら経済学者を一瞥して注目するのは、朱の後の世代であ

る小宮や宇沢など非マルクス系の理論経済学者の業績も紹介されている点である。改革開放後の朱の関心の広がりを感じさせる選択である。

中国帰国後の朱は、日本の実情はもちろんのこと、日本を含む海外の経済学の展開についても知る環境になかった。大塚の学問に限っても、人間類型論、局地的市場圏、共同体論、国民経済論など、戦後に結実する大塚史学の業績（批判も含めて）もほとんど知る由もなかったのではないか。ところが、朱（1999）の大塚に関する解説を読むと、比較経済史の原点にある方法、特にイギリス・オランダの比較史的視点を重視し、上記の業績を正確に追求しているだけでなく、後年の著作についてもかなりの理解を示していることがわかる。その全体を紹介するのは難しいが、要点と疑問点を幾つか示す。

朱は大塚史学のシステムは巨大であると評し、これを3つに大別している<sup>58</sup>。第1はマルクス主義経済学と関連している部分として、以下の4点があげられている。

- (1) 前期的資本関する研究 (2) 近代資本主義の発展に関する基本的条件の研究 (3) 局地的市場圏論 (4) 共同体の基礎理論

第2はウェーバー宗教社会学と関連する部分として、2点があげられている。

- (1) 資本主義の精神の研究 (2) 社会科学の方法と思想史方法論
- 第3は信仰と社会科学の関係についてである。

こうした分類を補足するため、朱は大塚の業績を5つの時期に区分し、整理を行っている<sup>59</sup>。第1期は、20世紀の30年代を中心とする業績で、「いわゆる前期的資本なる範疇について」と『株式会社発生史論』が刊行された時期である。第2期は資本主義成立に関するドイツ歴史学派経済学の古典理論を批判し、大塚史学の根幹が出来上がった時期であり、『欧洲経済史序説』（1938年）をあげている。朱が直接大塚の学問に接していたのは、ほぼこの二つの時期に相当する。

第3期は戦時末期の『近代欧洲経済史序説』（1944年）から、戦後の『近代資本主義の系譜』（1947）、『宗教改革と近代社会』（1948年）へと続く

時期である。戦時末期から戦後改革期の著作を朱は統一的にとらえ、大塚が日本の民主改革を呼びかけた時期であるとしている。第4期は『共同体の基礎理論』（1955年）から1965年刊行の『国民経済』を業績としてあげている。第5期は日本の官僚主義を批判しながら、資本主義の現状について警鐘を鳴らし、将来像を構想した時期ととらえている。

第4期は朱の中国近代化論にとっても最も重要な大塚の著作の刊行期であるが、その意義について深く触れていないのは残念である。最後の二つの時期の業績こそ、朱が知らなかった新たな大塚の学問・思想の展開期である。第5期の業績としては、『宗教改革と近代社会』の増訂版と『社会科学の方法—ヴェーバーとマルクス』（1966年）をあげている。

1979年刊行の『生活の貧しさと心の貧しさ』（みすず書房）、『意味喪失の時代に生きる』（日本基督教団出版局）などの著作は、朱の目にとまったのだろうか。中国が改革開放へとかじを切る頃、大塚は奇しくも資本主義の行きつくはてに生じる形式合理性の問題と大衆の心理的疎外現象を指摘している。朱は中国史家竹内好との対談「歴史のなかのアジア」や論稿「予見のための世界史」もあげているが、解説はない。特に前者には、大塚の当時の中国に対する好意的評価がある<sup>60</sup>。限られた情報のなかでの発言ではあるが、朱の評価を知りたいところである。

朱は内村鑑三や矢内原忠雄に学んだ敬虔な基督者としての大塚の信仰についても深く理解している。内村の「二つのJ」を継承し、人類の普遍的価値であるプロテスタンティズムを日本への愛と結びつけたことを指摘する。大塚の思想の核心であるこの問題を、儒教的倫理のもとに育った朱が中国の近代化にどう適応できると考えていたのか、この点もやはり知りたい。朱の大塚久雄評価からは「時代遅れ」とか、「西洋中心主義」、「単線的歴史観」といった通俗的批判や誤解はみられない。むしろ、同じアジア人として深く共鳴している。朱（1990）は次のようにのべている。

先生の学問する心は、西洋近代経済史を解明するのみでなく、むしろ

日本及びアジアの発展途上にある国々のために、その近代化の途を探し求められたのである。……例えば、近代化の人的基礎とか、地域市場圏とか、現代化と工業化の概念などは、殆ど直接我々のこれからの改革理論の拠所となる<sup>61</sup>。

そうした「改革理論の拠所」となる一つの著作として中国語に翻訳されたのが、大塚の初作『株式会社発生史論』（有斐閣、1938年）であった。同じ年に刊行された『序説』が教科書として使用され、さらに『近代欧洲経済史序説 上巻』へと発展したのに対して、『発生史論』は「不遇の大著」（内田義彦）と呼ばれ、大塚の賛同者の間でもあまり読まれることがなかった。

2001年、同書は「現代日本社会科学名著訳叢」の一つとして、朱紹文主編のもと、胡企林、胡欣欣、江瑞平、韩朝华の4名によって訳された。扉には穏やかな微笑をたたえた大塚の写真が掲げられている。ヨーマン会編（1990）からの転載である。朱は2000年に大河内の『スミスとリスト』の中国語訳も企画・刊行していた。東大への留学から60年が過ぎていたなか、この2冊の翻訳は朱の執念の達成である。

『発生史論』の中国訳は、単に恩師への追慕からだけでなく、前述のように中国経済に関する現代的関心からなされた。セゾン文化財団から資金援助を受けた企画だったのも、そのためである。同書の「序」冒頭では、2001年、中国が世界貿易機関（WTO）に加盟したことが決定的な意味をもったこと、この結果、外国資本が中国市場に参入し、企業制度改革が市場競争力をたかめる重要な条件となったことなどを強調している。朱は株式会社という形態こそ、現代企業制度の基本的歴史形態であるとし、同書の翻訳の意義を次のようにのべている。

我が国の学者や政府に株式会社制の企業形態の歴史的発展と近代民主型の株式会社形態に関する研究を提供するため、我々は古典的名作となった

この『株式会社発生史論』を訳した。この本は「株式会社」という一つのテーマに関する専門的な発生史の研究に見えるが、実は17世紀以来の「資本集中形態」の形成、発展や変化の過程を研究している。それを踏まえて、近代資本主義は長かった中世から抜け出て、徐々に近代化へと向かったことを明らかにしたのである<sup>62</sup>。

以上は、市場経済を導入し、成長する中国を念頭に置いた紹介となっている。朱は大塚の盟友にして既に故人となった高橋幸八郎が1938年に著した書評「豊かな歴史の現代的観照—大塚久雄著『株式会社発生史論』」の意義も紹介している<sup>63</sup>（この書評もヨーマン会編（1990）に収録されている）。大塚のやや忘れかけられた初作（及び書評）の現代的意義を復活させたのは、朱紹文を中心とする中国人研究者であった。

## おわりに

キミは中国人なのだから、やはり中国という国の歴史的使命を背負って勉強すべきだ、だからフリードリヒ・リストをやりなさい。

これは大河内演習の門を叩いた朱に、恩師が語った言葉である。朱が一生をかけた学問とは、恩師から与えられたこの課題であった。朱が大塚の『序説』の「序」の理解に数十年の歳月を費やしたのも、比較経済史の中国への適応の問題であったことは既述した。朱は中国の「リスト」であり「スミス」でもあった。

だが、朱が二人の恩師、大河内・大塚から学んだ最も重要な点は、スミスやリスト、マルクス、ヴェーバーなどの学説にとどまらない。最も重要な点は教条主義の誤りである。それは両恩師の学説をも絶対視せず、中国の現実に即して吟味することも要請されている。その苦闘は改革開放後の晩年を経て、最晩年まで続いたのではないか。この詳細については、他日を期したい。

## 註

- 1 本稿は孫宏程（武蔵野大学卒、神戸大学大学院経済学研究科修士課程修了）の協力を得て、齋藤が主に執筆した。孫は武蔵野大学経済学部で齋藤ゼミで学んだ中国人留学生である。当時、孫は朱紹文の中国語著作を収集し、幾つかの箇所を日本語に訳した。入手が難しかった大塚の『株式会社發生史論』の中国語訳は、中国在住の孫の友人を介して届けられた。注3の張や注15の鍾少華についての記述も孫の調査に依っている。また、明治大学の三田剛史教授、帝京大学の周雨霏講師、本学の卿瑞講師からも貴重なご教示を得た。以上、ここに記して感謝したい。ただし、本稿に誤りがあれば、それは筆者齋藤の責任である。
- 2 朱は1979年12月、大河内演習同窓会（1979）の刊行を機に短期間来日した後、1980年代半ば以降たびたび来日し、本格的に日中の学術交流に尽くすようになった。1984年9月には法政大学主催の日本の経営をめぐるシンポジウムに参加している。（『日本経済新聞』1984年10月6日朝刊「海外から見た日本の経営：光あれど影もあり」）。1986年10月から開始された中国社会科学院研究院と東京大学経済学部との学術交流では、朱は中国側の中心となった。この研究会は同年9月を第1回とし、91年3月まで5回に及んだ。その成果は、関口尚志・朱紹文・植草益編（1992）となって現れている。同書において朱の論稿「経済体制改革の推移と展望」が第1章に置かれていることに、朱の存在の大きさの一端がうかがえる（中国側の論稿では、朱のみ日本語で書かれた）。また、第15章には関口尚志「郷鎮企業の歴史的意義」が掲載されている。関口は東大における大塚久雄の西洋経済史の後継者であった。同書は、大塚の学問によって結ばれた絆が一つの契機となって刊行されたと言えるのではないか。
- 3 中国社会科学院ホームページ。この追悼文の執筆者は張琦であり、後に張琦『経済所人文庫 — 朱紹文巻』2019に収録されているようだが、筆者は未見である。
- 4 同上、中国社会科学院ホームページ。
- 5 三田（2021）、10-11頁。この二つの刊行物は、対日宣伝のための戦時協力誌であったが、三田は朱の主張に日本への抵抗の姿勢を読み取っている。本文、3も参照。

- 6 参照、赤江（2013）、108 頁以下。
- 7 差しあたって、参照、齋藤（2016）、（2023）。
- 8 この時期の朝鮮人学生の動向については、永島広紀（2002）が詳しい。そこには旧帝大や台北帝大、官立医科大学、官公立大学などを対象に、朝鮮人学生の氏名や出身高校、専攻などが明らかにされている。この調査によれば、当時東京帝国大学経済学部に通った学生は 30 人であり、そのなかにリストやドイツ歴史派経済学を大学院で専攻した者も記載されている。
- 9 石崎（2008）、62-3 頁。同書によれば、法政大学教員時代（1935-39 年）の大塚ゼミには朝鮮人学生も参加し、熱心に受講していたこと、彼らは大塚への信頼が厚く、帰国後も大塚の健康を案じて、朝鮮人参を送ってきたことなどが披露されている。さらに、大塚が彼らに表向き禁止されていた朝鮮経済史の研究方法を教えたという点は興味深い。それが何かは同書で具体的に言及されていないが、土地制度（共同体）を基礎にした分析ではないだろうか。また、彼らのなかに『欧洲経済史序説』（時潮社、1938 年）を祖国に持ち込もうとして門司港で没収された者や、京城に持ち込み、ホテルで読んでいた学生がいたという事実も披露されている。この『序説』は近世以降の西欧諸国の盛衰という事実から出発し、イギリスの最終的勝利の原因を単なる軍事力による制覇ではなく、下からの国民的生産諸力の向上に求めたものであった。その担い手こそ、独立自営農民（ヨーマン）であった。同書は、彼らにとっては祖国の自立と近代化を考える文献でもあった。朱もこの『序説』を中国に持ち帰ったことについては、本文で後述する。
- 10 例えば、大塚の『共同体の基礎理論』（岩波書店、1955 年）が李榮薫によって翻訳され、1982 年ソウルの石計社から刊行されている。また、朴玄塚は大塚の国民経済論の批判的検討者として重要である。朴玄塚編訳『資本主義発達史研究序説』한길사社、1981 年には、大塚の論稿が 3 本、松田、高橋、小林昇がそれぞれ 1 本掲載されている。
- 11 以上の経緯については、張（1990）、ヨーマン会編（1990）所収、72-73 頁。張は戦時中、大塚とマックス・ヴェーバー『儒教とビュリタニズム』を共訳している。これは、後に大塚久雄・生松敬三訳『宗教社会学論選』（みすず書房、1972 年）に「付録」として収められた。
- 12 張（1954）序、xi。この文章に続いて、大塚については「近代資本主義の生成に関する教授の高説は、困難と抵抗感を伴わないではなかったが、これを

納得するにつれて、私の重商主義研究に強く影響した」との指摘がある。

- 13 田島 (2020)、281 頁、同 (2022)、349 頁は、大塚を師と仰ぐこの二人の間に何らかの交流があったことを示唆している。その接点があるとしたら、やはりリストであろう。トーマス・マンに関する張の翻訳 (1942) について、大塚 (1943) はリストの意義に言及している。参照、大塚 (1969a)、426 頁。
- 14 朱・佐藤 (1985)。このインタビューが行われたのは、1984 年 11 月 8 日のことである。この記事には 1979 年 11 月に朱が戦後初来日した際、大河内夫妻と撮影した写真が大きく掲載されている。上掲稿、47 頁。聞き手の佐藤は、東京商大で高島善哉 (1904-90) に学んだ。高島は『社会政策の根本問題 スミスとリスト』を日本評論社から、1941 年に著しているが、このインタビューで高島は話題になっていない。
- 15 朱・鐘 (2003)、鐘少華 (2003) 所収。このインタビューは、中国社会科学院経済研究所で行われた。鐘が対象とした中国人留学生は 18 人で、このうち整理したのは 14 人 (日本語版では 16 人) であったという。鐘 (2003)、7 頁。このなかで、朱のインタビューは冒頭に置かれている。鐘は同研究所の研究員であり、その父親は「中国民俗学の父」と称された鐘敬文である。
- 16 朱・加藤 (2004 a～d)。
- 17 ただし、それぞれの記述ごとに註をつけると煩雑になるため、特段必要な箇所以外は省略した。
- 18 インタビューは、その実施時期や聞き手、掲載媒体等によって話しの力点が異なる可能性があろうし、語り手の記憶違いもありうる。帰国直前に関する朱の証言は、やや錯綜している (註 51 参照) が止むを得ない。最初のインタビューから最後までほぼ 20 年が経過しており、この間の中国の経済成長は著しく、日中関係も変化していることも考慮が必要であろう。
- 19 朱・加藤 (2004d)、27 頁。
- 20 朱・加藤 (2004a)、19 頁。
- 21 朱・加藤 (2004a)、18 頁。ここで朱は祖父のことを、「誇り高き中国の古きインテリ」であり、「独力で事業を起こした」と紹介している。
- 22 長崎丸については、岡林編 (2006)、21 頁以下による。
- 23 朱・鐘、27 頁。
- 24 朱の中国近代化構想については、日本留学前、留学時、帰国直後、文革期、改革開放後等々時代ごとの検討を要する。リストとスミスに学ぶという視点は

- 日本留学以降、一貫していたと思われるが、その力点は異なるのではないか。
- 25 この間の経緯については、参照、二見（1978）。
- 26 前掲、朱・鐘、27 頁。ただし、本郷での寮生活はわずか半年で終わり、1935 年 9 月、寮が駒場に移転してからは、戦争色が深まり、本来の一高精神が感じられなくなったという。朱（1999b）、50 頁。
- 27 朱・佐藤、50 頁。
- 28 朱・鐘、55-58 頁。ここに日付は書かれていないが、12 月 17 日のことである。翌日の『朝日新聞』朝刊（動静）には、「朱紹文・中国社会科学院経済研究所教授と懇談」と記載されている。
- 29 大河内演習は「経済学史」と「中小企業」のグループに分けて行われていた。朱と横山（テーマはケネー）は前者、松木は後者に属していた。大河内演習同窓会編（1979）、23 頁。
- 30 朱・加藤（2004a）18 頁。
- 31 ただし、寮では彼ら是一緒であり、文理専攻の分けもなかった。朱が過ごした本郷の寮聚三番では、少なくともほかに中国人 2 名、日本人 2 名が同室だったようである。河西（1992）、305 頁。
- 32 田島（2022）、345 頁。
- 33 隅谷は大河内が江古田の自宅で開いた「資本論研究会」に参加していたが、大河内演習生ではない。隅谷は大河内との表立った関係には注意し、39 年度は柳川昇、40 年度は舞出長五郎の演習で学んでいる。隅谷（2000）、29、33 頁。
- 34 経済学は米国留学帰りの教師から、ミシガン大学の教科書を使って英語で習ったという。朱・加藤（2004b）、11 頁。
- 35 朱・佐藤、46 頁。
- 36 大河内演習同窓会編（1979）、11 頁。
- 37 朱（1990）、69 頁。これがどういう機会に行われた講演なのか、朱は明言していない。大河内は 1937 年度の河合栄治郎主催の古典研究会でリストの国民経済学の体系について講演している。前掲、大河内演習同窓会編、6 頁。しかし、当時一高生だった朱がこれを聴講する機会はなかったように思う。
- 38 大河内（1936）、1 頁。
- 39 朱・加藤（2004d）、26 頁には、この時の大河内演習生の写真が掲載されている。
- 40 朱・加藤（2004d）、25 頁。
- 41 前掲、大河内演習同窓会編、42 頁。中国におけるリストの受容については、

Mei (2018) が詳しいが、朱が大河内に学んだことは書かれていない。

- 42 この時の演習に同じく一高出身の中国人、楊覚勇がいた。楊は「上海在華紡について鋭い批判的な報告をし、学生たちに感銘をあたえた」という。大河内演習同窓会編 (1979)、45 頁。楊は後にジョージタウン大学教授となった。田島 (2020)、306 頁、表 3
- 43 朱・佐藤 (1985)、48 頁。この論稿は雑誌『揚子江』に連載した朱 (1943) のことであろう。その骨子は、三田 (2021)、10-11 頁、田島 (2022) に紹介されている。田島 (2022)、350 頁ではこれを「学位論文に向けた修士論文の活字化であろう」と指摘している。『揚子江』は 1938 年創刊の雑誌で、汪兆銘政権の支持母体であった。
- 44 朱・佐藤、48 頁。
- 45 三田 (2021)、11 頁。なお、一高時代の友人であった河西健一によれば、朱は 1943 年の秋には「日本の戦況があまり良くない」という情報を偶然出会った際に声を潜めて伝えたという。河西 (1992)、305 頁。朱がこの種の情報をごどこから得ていたかは不明であるが、ここにも、日本の協力者とは言えない一面が現れているのではないか。出陣学徒壮行会が挙行されたのは、同年の 10 月 23 日であった。
- 46 朱・加藤 (2004a) 17 頁。朱が逮捕されたのは、1944 年 5 月 22 日未明のことであった。ここでは「執筆していた」とあるから、この時点で博士論文はまだ完成していなかったようである。ただし、タイトルは「フリードリヒ・リストと現代中国」と決まっていたようである。
- 47 同上書、44 頁。安藤も「この両先生が講義や演習を持たれる前と後では東大経済学部出身者は学問的にだいぶ違うのではないかとさえ思われる」と述べている。安藤 (1969)、5 頁。
- 48 前掲、大河内演習同窓会編、18 頁、27 頁。ここに収録されている「大河内演習小史」をとりまとめたのは、朱の同期生で後年法政大学教授となった松岡磐木であり、後に松岡 (1990)、26-61 頁に再録されている。
- 49 朱 (1990a)、68 頁。安藤良雄も「……いよいよ大塚先生が東大で「初講義」をされる日、私は早めに入り、いささか興奮を覚えながら先生のこられるのを待ちしていた」と回想している。前掲、安藤、3 頁。
- 50 その「序」にある一節「要するに私は『経済史的な余りに経済史的な』立場はこれを越えねばならぬと思う」という箇所を、朱は興奮して繰り返し暗唱

- できるだけ読んだ。前掲、朱、69 頁。安藤良雄も同様の感想をのべている。前掲、安藤、4 頁。
- 51 以上については前掲、朱、68-69 頁。本文では、朱の蔵書は「逮捕時に憲兵に没収されて戻らなかった」と紹介したが、ここではこの 2 冊だけ持ち出したと証言している。こちらが正しいと思われるが、何故この 2 冊だけ持ち出すことができたのか、朱は語っていない。朱・佐藤（1985）、49 頁では、釈放後、別府温泉で療養していたという証言があることから、この時再逮捕の噂を聞いた朱は東京に戻らず、下関から釜山に渡ったと考えられる。だが、この間の事情については不明な点が多い。
- 52 1938 年の著作『欧洲経済史序説』と、1944 年刊行の『近代欧洲経済史序説』を比較されたい。
- 53 大塚の生産力と経済倫理については、参照、齋藤編・大塚著（2021）、13-40 頁。
- 54 なお、福島赴任後数年にして、小林は最初のリスト研究を著す。『フリードリッヒ・リスト序説』（伊藤書店、1943）がそれである。阪本（2022）、157 頁、註 13 では、小林が自著を朱に送ったことを明らかにしている。二人の交流は戦後に深まったようである。1984 年、朱が大塚久雄宅を訪問した際、その案内をしたのは小林と中川敬一郎であった。前掲、朱、71 頁。さらに 1990 年、名古屋でアダム・スミスの会主催の国際シンポジウムが開催された際、同会の会長の任にあったのが小林であり、中国から招待されたのが朱であった。朱は「中国におけるスミス」と題して報告している。
- 55 本稿で検討できなかったが、戦時期に展開された大河内と大塚の経済倫理と生産力論については、柳澤（2008）第 VIII 章、335 頁以降が戦時経済の文脈で検討している。田村（2018）、286 頁では、大河内著『スミスとリスト』の小林への影響は小さいとの指摘がある。
- 56 前掲、三田、19 頁。
- 57 朱（1990）、71 頁。
- 58 朱（1999a）、468 頁以下。
- 59 朱（1999a）、471 頁以下。
- 60 大塚・竹内（1968）、大塚（1969f）、306 頁以下。
- 61 朱（1990）、71 頁。
- 62 朱（2001）、5 頁。
- 63 前掲、朱、6 頁。

## 主要参考文献

本文および注に現れた文献のなかで、重要なものを選定した。

### 1. 朱紹文の主な著作

#### A 著書・編著

朱紹文 (1999a)『經典經濟学与現代經濟学』北京大学出版社

関口・朱・植草編 (1992)『中国の經濟体制改革』東京大学出版会

#### B 翻訳

朱紹文校・胡企林、胡欣欣、江瑞平、**韩朝华**訳 (2001) 大塚久雄著『股份公司發展史論』中国人民大学出版社

#### C 論文・その他

朱紹文 (1943)「フリードリヒ・リストの生産力理論と現代中国の再建 (上) (下)」『揚子江』6 (1)、(2)。筆者未見

朱紹文 (1947)「対日講和と日本の改造」『清議』7 (1) 筆者未見

朱紹文 (1986)「大河内一男先生と中国」大河内演習同窓会編『わが師大河内一男』所収。

朱紹文 (1990)「『大塚史学』と中国の近代化」ヨーマン会編 (1990) 所収。

朱紹文 (1992)「一高生活の思い出」昭和13年一高会文集発行世話人会編 (1992) 所収。

朱紹文 (1999b)「暗い谷間時代の思い出 — 歴史の証言として」『向陵』42 (2)

### 2. インタビュー記事

朱紹文・佐藤金三郎 (1985)「現代中国と日本 — 大河内一男先生のこと、中国经济改革のこと」『経済セミナー』361号

朱紹文・鐘少華 (2003)「わが青春の日本 — 朱紹文は語る」鐘少華編 (竹内実監訳)『あのころの日本』日本僑報社 (原著 鐘少華編 (1996)『早年留日者談日本』山東画報社) 所収。

朱紹文・加藤千洋 (2004a)「日中の暗い谷間を超えて — 朱紹文氏に聞く (1)」『図書』9

朱紹文・加藤千洋 (2004b)「海の船に乗って — 朱紹文氏に聞く (2)」『図書』10

朱紹文・加藤千洋 (2004c)「嵐の中へ — 朱紹文氏に聞く (3)」『図書』11

朱紹文・加藤千洋（2004d）「独房の日々 ― 朱紹文氏に聞く（4）」『図書』12

3. 朱紹文に関する論文・エッセイ等

河西健一（1992）「朱朝仁のこと」昭和13年一高文会集発行世話人会編所収。

阪本尚文（2021）「暗い時代の人々 ― 博棣華と朱紹文のこと」『大警視だより  
続刊』（12）中国社会科学院ホームページ

阪本尚文（2022）「暗い時代の人々 ― 博棣華と朱紹文のこと」阪本尚文編（2022）  
『知の梁山泊 草創期福島大学経済学部の研究』八朔社所収。

田島俊雄（2020）「朱紹文研究員（1915-2011）とその時代：戦時下の日本留学と  
戦後の中国」『経済志林』87（3/4）

田島俊雄（2022）「朱紹文研究員と戦時下の日本留学 ― 一特設高等科と東大経済  
学部を中心に ―」孫安石・大里浩秋編（2022）所収。

三田剛史（2021）「帰国前後の朱紹文」『中国研究論叢』21

4. その他

赤江達也（2013）『「紙上の教会」と日本近代 無教会キリスト教の歴史社会学』  
岩波書店

安藤良雄（1969）「大塚先生『初講義』のころ」『大塚久雄著作集』第2巻「月報」  
岩波書店

大河内一男（1936）『独逸社会政策思想史』日本評論社

大河内一男（1943）『スミスとリスト 経済倫理と経済理論』日本評論社

大河内演習同窓会編（1979）『戦前戦後大河内演習の25年』東京大学出版会

大河内演習同窓会編（1986）『わが師大河内一男』大河内演習同窓会

孫安石・大里浩秋編（2022）『明治から昭和の中国人日本留学の諸相』東方書店

大塚久雄（1938/1969a）『欧洲経済史序説』『大塚久雄著作集』第2巻所収 岩波  
書店

大塚久雄（1943/1969b）「書評：トーマス・マン著 張漢裕訳『外国貿易による  
イギリスの財宝』」『大塚久雄著作集』第5巻所収 岩波書店

大塚久雄（1943/1969c）「経済倫理と生産力」『大塚久雄著作集』第8巻所収 岩  
波書店

大塚久雄（1944/1969d）「生産力と経済倫理」『大塚久雄著作集』第8巻所収 岩  
波書店

大塚久雄（1944, 1969e）『近代欧洲経済史序説（上）』『大塚久雄著作集』第2巻所  
収 岩波書店

- 大塚久雄・竹内好 (1968/1969f)「歴史のなかのアジア」『大塚久雄著作集』第7巻 岩波書店
- 岡林隆俊編 (2006)『上海航路の時代』長崎文献社
- 小林昇 (1990)「大塚先生への報告」ヨーマン会編 (1990) 所収
- 齋藤英里 (2016)「大塚久雄の比較経済史 — 英蘭比較の中の日本」『日本経済思想史研究』15
- 齋藤英里 (2015, 2017, 2019)「比較経済史の誕生 — 大塚久雄『株式会社発生史論』に関する一考察 — (1)～(4)」『武蔵野大学政治経済研究所年報』10、14、15、19
- 齋藤英里編・大塚久雄著 (2021)『資本主義と市民社会 他 14 篇』岩波書店
- 齋藤英里 (2023)「内村鑑三から大塚久雄へ — 事実の子たれよ、理論の奴隷となるなかれ」『内村鑑三研究』56
- 昭和 13 年一高会文集発行世話人会編 (1992)『新塾：第一高等学校卒業半世紀文集』昭和 13 年一高会文集発行世話人会
- 隅谷三喜男 (2000)『激動の時代を生きて — 社会科学者の回想』岩波書店
- 田村信一 (2018)『ドイツ歴史学派の研究』日本経済評論社
- 張漢裕訳 (1942) トーマス・マン著『外国貿易によるイギリスの財宝』岩波書店
- 張漢裕 (1954)『イギリス重商主義研究 国民主義的生産力保育体系の一類型 その基礎・政策及び論説』岩波書店
- 張漢裕 (1990)「ゴールめざしてひたすら走る人にほまれ冠が約束される」ヨーマン会編 (1990) 所収
- 二見剛史 (1978)「第一高等学校における中国人留学生教育」『国立研究所紀要』95
- 松岡磐木 (1990)『ひよどり風海』法政大学出版局
- 柳澤治 (2008)『戦前・戦時日本の経済思想とナチズム』岩波書店
- ヨーマン会編 (1990)『師・友・学問 — ヨーマン会の半世紀 —』非売品
- Mei, J. (2019) “Friedrich List in China's quest for development” in Hageman, H., Seister, S. and Wender, E. (eds), *The Economic Thought of Friedrich List*, Routledge.